

原作を読んでから映画を観るか、映画を観てから原作を読むか

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

12月号ゆえ、今年の読書で面白かった2冊の書籍を紹介する。

いずれも映画化が話題となったものであるが、タイトル、作者に惹かれ、書店の平積みコーナーから選び、一気に読破した小説である。

一冊目は軽妙な大相撲解説でも有名な内館牧子氏の『終わった人』。

大手銀行の出世コースから子会社に出向、転籍させられたままに定年を迎えた一流大学卒男性の無念を描いた物語である。

スリリングなシーンは無いものの、街中で溢れているような悲哀の満ちた会社員人生をコミカルに描出しており、自営業ではあるものの定年年齢に達しつつある自分にとって、様々なことを考えさせる内容であった。

2冊目は自著が、監督作品としても制作され、第71回カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞。公開1週間で観客100万人を突破した是枝裕和氏の『万引き家族』である。

是枝監督は、2004年には『誰も知らない』で、血の繋がった母親から捨てられてしまう子どもたちを描き、2013年には『そして父になる』で、病院で赤ん坊を取り違えられた2つの家族が、「血のつながりか、ともに過ごした時間か」を迫られ苦悩する話を描いている。

そして今回の作品が映し出す家族の

物語も実に多彩であり、様々な社会問題を浮き彫りにしている。

そこで両者ともに人間の持つ脆さ弱さを浮き彫りにした作品であったが、『終わった人』は現実社会でいかにもあり得そうな話。『万引き家族』は無さそうであるにはあり得そうな話と捉えた。だからこそ小説も映画も、人々の想像力を引き出しヒット作となるのである。

人によって様々であるうが、通常、小生はベストセラー書籍を読んでから映画を観ることとしている。

理由は、本は全てを網羅しているため筋書きが長く、映画は、そのハイライトシーンが強調され内容が濃いからである。

逆の順番で、映画を観てから本を読むと、役者のイメージが強すぎて内容に没頭出来なくなる。単にシナリオを知ってしまったからかもしれないが、それにしても今回紹介した2つの作品。ともに映画の配役が素晴らしい。

『終わった人』なるタイトルだけから想像すれば、館ひろし、黒木瞳の美女カップルは極めて不自然と思ったが、小説内の主人公夫妻を演じるにはぴったりと、本を読みながら納得した。

そして『万引き家族』。くしくも名女優・樹木希林の存命中に公開された最後の映画となったが、彼女を始め、リリー・フランキー、安藤サクラなど出

演者全員が、まさに「はまり役」であり、映画を観ながら小説内で印象となったシーンが身に染みした。

日本には小説を原点とした素晴らしい脚本を演じる役者がいるものだ。

英国の詩人バイロンの言葉「事実は小説よりも奇なり」は有名である。そこで世の中に

は小説になりそうな実話が多数存在し、

名優が演じる映画になりそ

うな小説になっ

ていっているの

であろう。

そして実社会で物語性のある出来事は、大概が不都合な真実であらう。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

